

平成28年度 社会科大研
社会科研究テーマ

見方・考え方を成長させる社会科学習

第4学年

熊本地震から考える私たちの安心・安全を守る暮らし



授業記録

平成28年12月1日(木)第2校時

場所 4年2組教室

定松良彰 平川 純哉（授業者）

0 単元の学習に入る前に行ったアンケート結果

学級の子どもたちが、地震後どこで過ごしたかを把握する目的でアンケートを行った。地震発生後から学校再開までの期間において子どもが寝泊した場所を分類すると以下のようになった。(調査34人)

1 すべて自宅で宿泊(8人)

こうき まさる かんた こうめい かずあき ゆうな もえ りよ ハンナ

2 自宅外での宿泊を経験(25人)

あ 親戚宅のみ経験(3人): たつき ますひで しんじろう

い 車中泊のみ経験(2人): ようた はるみ

う 車中泊+親戚または知人宅を経験(7人):

ともお あすと かな うた すみれ えりか ゆり

え 車中泊+避難所を経験(5人): ゆうや あきな こなな ひより ごうし

お 親戚宅+避難所を経験(4人): らいき だえん ふうか みわ

か 避難所のみ経験(4人): ゆう しゅうせい さやね ちはる

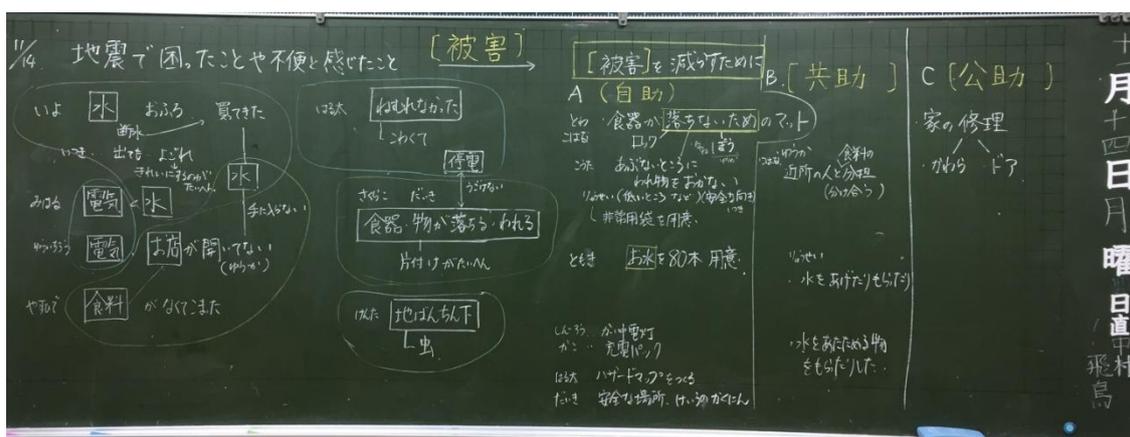
この結果だけでも、地震後の子どもの避難生活にはそれぞれ差が見られることがわかる。今回の学習では、やはり避難所生活を実際に経験した子どもとそうでない子どもとの間には話す内容に差が出てくることが予想される。それをむしろ好機と捉え、子どもそれぞれが経験したことを語る中で、避難所生活を経験したことのない子どもにも、本実践の願いにも迫らせていく。

授業記録

第1時「地震の被害を減らすためにしていることは？」 11月14日(月)

事前に行ったアンケート用紙に記入した「地震で困ったことや不便と思ったこと」についての発表から授業をはじめた。だえんさんやまさるくん、こうめいくんらは、「あまりなかった」などとつぶやいていた。しかし、他の子どもは水・電気・睡眠・地盤沈下など、自分の経験を話す子どもも多い。今回の地震によって受けた困ったことや不便と感じたことが地震の「被害」であること、さらに先週金曜日の授業中、大きな揺れがあったことから今なお地震の不安があることを伝えた上で、では被害を減らすために、地震後や今何かしていることはないかを尋ねた。「水や食料を蓄える」「物が棚から落ちないように工夫をする」といった自助に関することが出た後、しゅうせいくんが「アパートの下の人と水を分けたり、湯沸かしポットを貸し借りしたりした。」と述べたので、そこで、それまでの意見が「自分や家族でできること」でしゅうせいくんの意見

が「自分や家族と近くの人や仲間と協力でできること」として分類できることを押さえ、「自分や家族でできること」をA、「自分や家族と近くの人や仲間と協力でできること」をB、さらにはここで、自分たちではどうにもできなくて専門で仕事をしている人などをお願いしないと解決しないことをCと区別した。そこでまずはA（自助）について意見がないかを尋ねた。出てきた意見は、食器棚の固定や物の配置を低くする、携帯の充電パックを購入するなど自助に関するものが多かった。Bに移ると挙手が少なくなり、こななさんとふうかさんだけになったので二人に聞いた。二人は近所の人と食料や水を分け合ったことを紹介した。Cについては、さやねさんが家の屋根やドアの修理のことを述べた際、これまで学習した水の復旧や防犯の為の看板設置も当てはまることを付け加えた。そしてそれぞれABCを自助・共助・公助ということまで押さえて、本時の学んだことを記述させて授業を終了した。



【第1時の振り返り】

共助についての意見は出ないだろうと予想していたが、しゅうせいくんが「水を分け与えた」と述べたのは正直驚いた。しゅうせいくんのように、地震の中で近所の人との関わりを述べたものはほとんどなく、覚えていないと言うよりも、地域の人々との関わりそのものが乏しい様子を感じた。また、振り返りの記述からは、「被害を減らす」という減災の意識そのものを持っていなかったことが感じられるものもいくつか見られた。「減災」という意識を学級の子どもたちで共有できたことはこの時間の成果であった。

第2時「避難所のかんばんが違っているのはどうして？」 11月16日(水)

前時の学習では自分の家を中心に、地震の被害を減らすために出来ることを考えたが、さらに自分たちに出来ることはないかを考えるために、学校でのことを中心にこれから数時間学習していくことを伝えた上で、写真(右図)を提示した。見たことあるか?どこにあるか?何を示すものか?などを尋ねて確認した後2枚目(次頁右上)を提示する。提示直後から、「ちがいの理由がいえます」などと言って挙手する子ども数人。

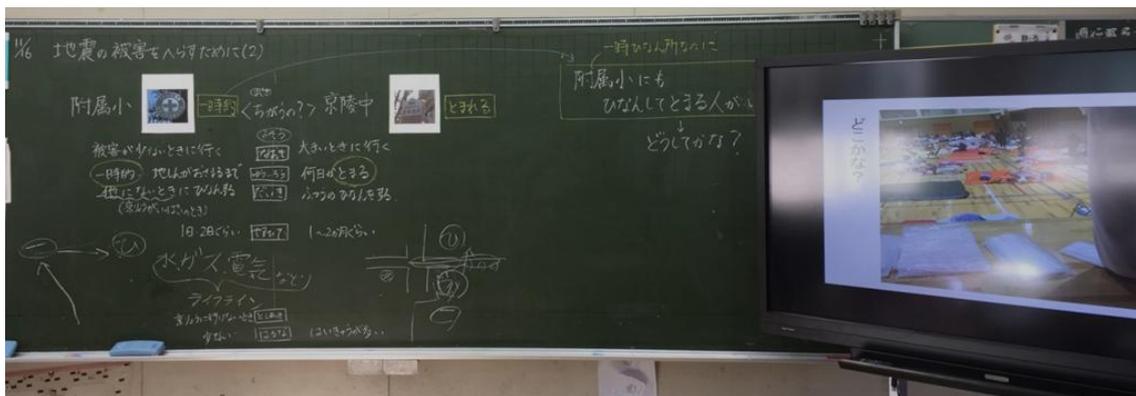


手を挙げられない子どもも半分以上いたので、まずは先ほどのように事実を確認していった。その後、看板の違いの理由に移り自分なりの考えを伝えさせた。どの子どもも「一時」という言葉に着目するが、とらえ方が少しずつ異なっている。こうきくんは地震被害の軽重、ゆうくんが短時間の避難か宿泊か、らいきくんは、他に行き場がないときに一時避難所で基本は避難所(京陵中)と発言する。これはすぐに、「隣同士だよ」



と指摘を受ける。被害の大きさによるか時間によるのかを調べようと伝え、「熊本市の地域防災計画(資料編)」の一部を配布する。避難所の区分と中央区各避難所がどの災害に対応しているかを示したものである。未習の漢字も多く、専門的な用語もあるため、一通り読み進めていく。そこから避難所と一時避難所では宿泊の想定があるかということ、附属小学校は運動場のみ避難場所として指定されていることを押さえる。「ゆうくんが言っていたことが当たっているね」と

しゅうせいくんらが声をあげる。避難所と一時避難所の違いを押さえた上で、次の写真を提示する(右図)。「ふぞく?」「けいりょう?」「ふぞくだよ。ほら、後ろの方」「ふぞくにも泊まっていた」「見た見た」など、それぞれ思ったことを声に出す子どもたち。附属小であることを確認した上で、「附属小は一時避難所なのに泊まっている人がいた」ということを伝え、それについて自分が思ったことを記述させるとともに、なぜ附属小に泊まっている人がいたのかを次時で調べることを伝えて授業を終えた。



【第2時の振り返り】宿泊を想定していない附属小学校に宿泊している避難者がいたことについて、休校期間中に学校に来たことのある子どもは知っていたが、多くの子どもはその事実を知らなかった。さらに、避難者がいたことについては「理由が分からない」と問いを持った子どももいれば、「そんなこと言ってもらえなかったんじゃないかな」と地震直後の混乱した状況からそれほど問いとして立ち上がらなかった子どもに分かれたようであった。ただ共通しているのは、休校中の本校でどのようなことが起きていたのかについて興味や関心が高いことである。さらに今回の授業中の発言から、ゆうくんが桜山中学校に避難していたことが分かった。附属小避難者の

様子を示した写真を提示した際、自分も桜山中の避難所に泊まったと発言した。桜山中学校避難所は後半の学習の中心となる避難所である。但し、ゆうくんの桜山中避難所運営のとらえ(見方)は、「食べ物を少ししかくれなかった」というどちらかというマイナスのとらえである。学習を通して、実際に桜山中での避難所経験をしたゆうくんの変容が学級の他の子どもの変容にも重要になるのではと考えた。

第3時「一時避難所の附属小にどうして避難者が泊まっているの？」について調べる(1)」

11月18日(金)

前時の学習で、附属小が一時避難所(宿泊を想定していない避難場所)にかかわらず避難して泊まっていた人がいたことの原因を調べるため、黒川副校長の説明を聞く(1組と合同)。副校長は下図のようなスライドを見せて説明を聞きながら、附属小に避難し宿泊していた人が居た理由について、①京陵中は避難者が入りきれないほど集まり、附属小に移ってきたこと ② 職員の取り組み ③保護者やボランティア、市役所などとの協力・連携などを中心に説明した。説明後、子どもからの質問には、副校長先生と、避難所開設直後の状況や本校体育館での宿泊も経験した松尾先生にも答えていただいた。使用したスライドや主な質問と答えは次の通り。

附属小は一時避難所なのに、なぜ、10日間の避難所運営をしたのか？



先生達にはできることの限界がある

先生達も被災者で、ボランティアとして附属小学校で避難所運営をしている！

- できるなら、被災者の皆さんで運営意識を持つことが大切です
- 健康面に不安がある方は、指定避難所にスタッフ(看護師)がいます

※誠心誠意運営・協力します

1 みなさんは、避難したの？

2 一時避難場所は、どんな役割？

3 どうして附属小学校に被災者が来たのかな？

4 何人くらい？

5 だれが運営したの？

避難所人数は、1日1日減っていった！



避難所の閉鎖は熊本市職員が行った

ようた : 病気になっている人がいて、泊まって病気にかかったりする人っていなかったんですか。

松尾 : 元気な人の方が多かったんですけど、慣れない避難所生活で体調を崩されたりする方もいらっしゃるって、休んでもよくなる人たちには、京陵中には市の職員の方とか看護師さんとか専門の知識を持っている医療関係の方がいらっしゃるって、そちらに案内したり連れて行って介護していただくようにしました。

しゅんのすけ (1組) : 倉庫の中の食べ物とかは腐ってなかったんですか。

黒川 : 実はですね。備蓄米とかアルファ化米にも消費期限があるんです。特に水は、過ぎているのを飲んだら健康な人でも病気になったりするんで、日付をしっかりと見てから使いました。ただ実際に期限が過ぎていたものはありませんでした。ただ、今入っているお水などには来年7月までとかのもあるので、そういうのは出して使ったり飲んだりすることが必要だと思います。

ますひで : 附小と附中はどっちが避難者が多かったんですか？

黒川 : 中学校は、1年生の教室とか廊下とかも使っていたということですけど300人くらいと聞いています。だから附属中の方が多かったのかなと思います。そして附属中の方がお年寄りの方がたくさん来られて、健康体操とかできる方がおられたのでそれもされたみたいです。

ふうか : 犬とか猫とか連れてきた人はいませんでしたか。

松尾 : ペットも家族だと考えてらっしゃる方もたくさんいるので小型の、ちょっとちっちゃい犬とかを連れてきている人がいらっしゃるって、体育館の入り口の、ウッドデッキのところに階段がありますよね。そこのところにつないで、犬たちは外で待っていました。それか、または車の中。やっぱり体育館の中に入れてしまうと犬とか猫とかのアレルギーを持っている人とかもいらっしゃるって、そういうときは避難所の中には入れないって、私たちをとってもらいました。

ともお : 附属小学校は10日くらいだったじゃないですか。京陵中はどのくらいあっていたんですか。

黒川 : はっきりとは分からないけど附属小学校は、5月9日に再開したよね。京陵中はその日か次の日だったと思うけどまだ、避難者はいたと思います。体育館の上の武道場にしばらくおられたみたいです。

ゆう : 附小と附中ではどちらが長い期間していたんですか。

黒川 : 実は附小と附中はどちらも大学の施設で、大学の先生と附小の島田校長先生と附属中の先生



【第3時を行って】 避難所での生活経験がなかったり、実際に見聞きしてなかったりした子どもにとって、避難所での様子を具体的に知るのは今回が初めてであり、避難所生活や運営が「たいへん」という認識を初めて抱いた子どもが何人もいた。新聞やテレビなどの情報からそのような「たいへんさ」や「困難さ」を認識していると想定していたが、想定よりも子どもの認識が低いことをとらえることができた。かなさんなどは体育館横の倉庫が防災倉庫だということを今日初めて知ったと感想に述べているが、他にも同じような認識の子どもも多いのではと感じた。避難所生活をもう少し具体的にとらえることができるよう見学や体験など具体的な調べ学習の必要性を感じたので、予定にはなかったが、その時間を設定することにした。